続・〈～enough to〉と〈so～as to〉はイコールか

田　中　　実

1. はじめに

『英語教育』2016年2月号（大修館書店）に拙稿「〈～enough to〉と〈so～as to〉はイコールか」が掲載されたが，そこでは紙幅の関係で十分に論じることができず，一部を割愛せざるをえなかった。そこで，本論では従来，〈～enough to〉構文と〈so～as to〉構文とがパラフレーズ関係で結びつけられることが多かった事実を踏まえて，両構文の実態を〈so～that〉構文にも言及しながら明らかにしてみたい。

2.「程度」と「結果」

2.1　まず，次のような例を見てみよう。

（1）a. He is old enough to be her father.

　　b. He is so old as to be her father.

(1 a, b）はいずれも，ほぼ「彼は彼女の父親といっていいほどの年ごろだ」という意味であるが，（1 b）は（1 a）に比べるとフォーマルな響きを持つ（cf. Declerck（1991 : 315））が，こうした〈～enough to〉と〈so～as to〉は必ずしもパラフレーズ関係が成り立つわけではない。次例を見られたい。

（2）a. You are old enough to travel alone.

　　b. ??You are so old as to travel alone.

（2 a, b）はいずれも，ほぼ「君はもうひとり旅ができる年ごろだ」という意味であるが，ネイティブチェックによれば，（2 b）は（2 a）に比べて，きわめて不自然な構文である。

こうした（1 a, b）と（2 a, b）のパラフレーズ関係における容認可能性の差は，なぜ生じるのであろうか。

2.2　通例，〈～enough to〉は「程度」と「結果」の意味を表すとされる。例えば，

（3）a. He was foolish enough to leave his car unlocked.（Thomson & Martinet, 1986 : 224）

b. 彼は車をロックしないままにしておくほど良識に欠けていた［= He was capable of doing it.］［程度］

c. 彼は良識を欠いているので車をロックしないままにしておいた［= He did it.］［結果］

Thomson & Martinet によれば，（3 b）の場合，実際に「車をロックしないままにしておいた」とは言っていない。そういうことをやりかねなかったと言っているにすぎない。

他方，〈so～as to〉は通例，第一義的には「結果」の意味を表す。

（4）a. He was so foolish as to leave his car unlocked.（*Ibid.*）

b. 彼は良識を欠いているので車をロックしないままにしておいた［He actually did so.］［結果］

こういう見方に立って，次に類例を見ておこう。

（5）a. I got up early enough to catch the first train.

b. 始発電車に乗れるほど早起きした［程度］

c. 早起きしたので始発電車に乗れた［結果］

この（5 a）を〈so～as to〉構文にパラフレーズすると，たちまち不自然な構文になる。

（6）??I got up so early as to catch the first train.

(6) が不自然ということになれば，Thomson & Martinet が言うような「結果」の意味は表せない。しかし，(6) を (7 a) のように変えてみると，まったく自然な構文となり，(7 b) のように「結果」の意味を表せる。

(7) a. I got up so late as to miss the train.

b. 寝坊したので電車に乗り遅れた［結果］

ところが，今度は，(7 a) を〈～enough to〉構文にパラフレーズすると，たちまち不自然な構文となる。

(8) ??I got up late enough to miss the train.

(8) では，Thomson & Martinet が言うような「程度」や「結果」の意味は表せないのである。

3. 機能的観点

(5 a) (6) と (7 a) (8) とをそれぞれ，並べて再見してみよう。

(9) a. I got up early enough to catch the first train.

b. ??I got up so early as to catch the first train.

(10) a. ??I got up late enough to miss the train.

b. I got up so late as to miss the tarin.

われわれは通例，早起きしてわざわざ始発電車に乗ろうとはしても，寝坊してわざわざ電車に乗り遅れようとはしない。また，われわれは通例，寝坊して，当然電車に乗り遅れるというようなことはあっても，早起きして，当然始発電車に乗るということにはならない。早起きの可能性の 1 つとして始発電車への乗車ということはありえても，当然のこととして始発電車への乗車ということにはならない。

そこで，(9 a, b) (10 a, b) から一応，次のようなことが言えよう。

(11) a.〈～enough to〉の to 以下は，「努めて［わざわざ］・・・する［なる］あるいは「そうしようと思えば・・・できる」といった意味内容となる。そうでない場合は不自然な構文が生じる。

b.〈so～as to〉の to 以下は，「当然［実際］・・・する［なる］」といった意味内容となる。そうでない場合は不自然な構文が生じる。

こうした観点を，例文に則して検証してみよう。まず，（1 a, b）では〈～enough to〉も〈so～as to〉も自然であるが，（2 a, b）では〈～enough to〉は自然であるのに対して，〈so～as to〉は不自然であった。その場合，もし，（11 a, b）が正しい観点であるとすれば，（1 a）は「彼は年をとっているので，そうしようと思えば彼女の父親の立場にたてる」といったニュアンスで用いられているのに対して，（1 b）は「彼は年をとっているので，当然彼女の父親といっていい立場にたてる」といったニュアンスで用いられている。

他方，（2 a）も（11 a）から，「年をとっているのだから，そうしようと思えばひとり旅ができる」といったニュアンスで用いられているのに対して，（2 b）は（11 b）から，「年をとっているので，当然ひとり旅ができる」といったニュアンスになるが，「年をとっている」ことの１つの可能性として「ひとり旅ができる」ということはありえても，「当然ひとり旅ができる」とは必ずしも言えないので不自然とされる。

さらに，いくつかの例を見てみよう。

（12）a. The singer was kind enough to answer my letter.

b. She was wise enough to make a reservation for a room.

c. The knife is sharp enough to carve the turkey.（Quirk *et al.,* 1985 : 1141）

d. Nancy walked quickly enough to be in time for the bus.

（13）a. He is so sick as to require a doctor.

b. The house is so dilapidated as to need major repairs.（Declerck, 1991 : 479）

c. She was so mad as to slap his face.

d. His handwriting is so small as to be virtually illegible.（Declerck, 1991 : 315）

（12 a）は「その歌手は親切にも私の手紙に返事をくれた」（「私の手紙に返事

をくれるぐらいその歌手は親切であった」）という意味であるが，（11 a）から「親切にもわざわざ返事をくれた」といったニュアンスが読みとれる。また，（12 b）は「彼女は賢明にも部屋の予約をしておいた」（「部屋の予約をしておくほど彼女は賢明であった」）という意味であるが，（11 a）から「賢明にもわざわざ部屋の予約をしておいた」，（12）は「そのナイフは鋭利なので七面鳥の肉を切り分けられる」（「七面鳥の肉を切り分けられるほど，そのナイフは鋭利だ」）という意味であるが，（11 a）から「鋭いナイフなので（例えば，私が）切り分けようと思えば，七面鳥の肉も切り分けられる」（The knife is sharp enough for me to carve the turkey.），（12 d）は「ナンシーは早足で歩いてバスに間に合った」（「バスに間に合うぐらいナンシーは早足で歩いた」）という意味であるが，（11 a）から「早足で歩いて努めてバスに間に合うようにした」といったニュアンスがそれぞれ，読みとられる。

他方，文字通りの意味は省くが，（13 a）は（11 b）から「彼は病気なので，当然医者に診てもらう必要がある」，（13 b）は（11 b）から「その家は崩れているので，当然大修理が必要だ」，（13 c）は（11 b）から「彼女は怒っていたので，実際彼の顔をひっぱたいた」，（13 d）は（11 b）から「彼の筆跡は小さいので，実際のところ判読できない」といったニュアンスがそれぞれ，読みとられるのである。

4. 意味的・語用論的観点

4.1　では，なぜ，（11 a, b）のようなことが言えるのであろうか。もう一度，（11 a, b）を確認してみよう。

（11 a, b）では，〈～enough to〉の to 以下は「努めて［わざわざ］・・・する［なる］」あるいは「そうしようと思えば・・・できる」といった意味内容になり，〈so～as to〉の to 以下は「当然［実際］・・・する［なる］」といった意味内容になるとされた。そこで，まず，enough について，enough には「十分に」という意味が備わっており，「十分に・・・する」ということが「努

力性」の意味につながり，〈～enough to〉の to 以下には上述のような意味内容が生じるものと考えられる。こうした「努力性」，すなわち，「努めて・・・する」という場合，「目的」意識が明白なので，実際，〈～enough to〉構文ではときに，to～の前置（preposing）が可能となり，前置された to 不定詞は，いわゆる「目的」の to 不定詞として機能する。

（14）a. To catch the first train, I got up early enough.［(9 a) より］
　　b.*To miss the train, I got up so late as.［(10 b) より］
　　cf. To catch the first train, I got up so early.

次に，so について，so は「結果」を表す接続詞としても機能し，実際，(9 b)（10 b）はそれぞれ，(15 a, b) のようにパラフレーズされることから，〈so～as to〉の to 以下に「・・・の結果，実際に」何かが生じる，と言える。

（15）a. I got up early, so I caught the first train.［(9 b) より］
　　b. I got up late, so I missed the train.［(10 b) より］

4.2　ここで，〈～enough to〉〈so～as to〉と〈so～that〉とのかかわりを見ておくことにしよう。(1 a, b)，(5 a)（6），(7 a)（8）のそれぞれ，〈～enough to〉構文と〈so～as to〉構文とともに，次のように並べられた〈so～that〉構文を見られたい。

（16）a. He is old enough to be her father.［= (1 a)］
　　b. He is so old as to be her father.［= (1 b)］
　　c. He is so old that he can be her father.

（17）a. I got up early enough to catch the first train.［= (5 a)］
　　b. ??I got up so early as to catch the first train.［= (6)］
　　c. I got up so early that I could catch the first train.

（18）a. ??I got up late enough to miss the train.［= (8)］
　　b. I got up so late as to miss the train.［= (7 a)］
　　c. I got up so late that I missed the train.

(16 a～c）はいずれの構文も自然であるが，(17 a～c）では〈so～as to〉構文

が，（18 a～c）では〈～enough to〉構文がそれぞれ不自然とされる。が，（16 c）（17 c）（18 c）に見られるように，〈so～that〉構文であればすべて自然な構文として受け止められる。つまり，〈so～that〉構文は〈～enough to〉と〈so～as to〉の両構文の意味とニュアンスを包含する，いわば中立的な構文である，ということになる。

したがって，〈so～that〉構文は「程度」の意味にも「結果」の意味にも解釈されるが，〈～so that〉構文になれば，通例，「結果」の意味にしか解釈されない。次例を見られたい。

（19）a. You're old enough to look after yourself.

b. You're old enough so that you can look after yourself.（以上，Quirk *et al.,* 1985 : 1140）

Quirk らは，（19 a）の〈～enough to〉を「結果」の意味にとり，（19 b）のように〈～so that〉によるパラフレーズを行っている。

4.3　これまで見てきた用例はすべて平叙文であったが，では，否定文での〈～enough to〉や〈so～as to〉にも（11 a, b）は適用可能であろうか（疑問文でのそれについては **4.4** を参照）。次のような例を見てみよう。

（20）a. Before medical science was well developed, a considerable portion of people didn't live long enough to reach even your age.

b. I've never been so poor as not to be able to afford a meal.（*LDOCE*[2]）

（20 a, b）はそれぞれ，「医学が十分に発達していないうちは，かなり多くの人々が君たち［高校生］の年齢にすら達することなく亡くなっていった」，「私は食事ができないほど貧しくはなかった」といった意味であるが，次のように，それぞれ，角括弧で示した部分に（11 a, b）は適用される。

（21）a. Before medical science was well developed, a considerable portion of people didn't [live long enough to reach even your age].

b. I've never [been so poor as not to be able to afford a meal].

すなわち，（21 a）では角括弧の部分の「長生きして努めて君たちの年齢にまで達することができる」というニュアンスがまず読みとれ，それ全体が否定される格好になっている。同様に，（21 b）では「貧しいので実際のところ食事ができない」といったニュアンスがまず読みとれ，それ全体が否定されている。

4.4 Quirk らの挙げる（19 a）の〈～enough to〉構文を **4.2** で見たが，その意味は「君は年をとっているので自分で自分の面倒はみれるさ」（「結果」）ということではあるものの，本論流に言うならば，ニュアンスとしては「君は年をとっているのだから，そうしようと思えば自分で自分の面倒はみれるさ」ということになる。

いま，この（19 a）を（いみじくも Quirk らはそうはしていないが）〈so～as to〉でパラフレーズしてみると，たちまち不自然な構文になってしまう。なぜであろうか。

（22）??You're so old as to look after yourself.

われわれは，「年をとっている」ことは，当然「自分で自分の面倒がみれる」ことにつながるとは普通考えない。年をとっていても，いや，年をとっているからこそ，自分で自分の面倒をみることができない人もいることを承知しているので，（22）のような〈so～as to〉構文は不自然だとみなすのである。

さらに，（19 a）と（22）については，次のように考えることもできる。すなわち，（19 a）の old は，old enough（～ほどの年ごろの）とあるとおり，「自分で自分の面倒をみれるほどの年ごろである」（「程度」）という意味では絶対的な年齢を表していない。他方，（22）の old は，so old（とても年をとった）とあるとおり，絶対的な年齢を表し，「とても年をとっているから自分で自分の面倒がみれる」という不自然な表現になっている。

こうした考え方は，次のような疑問文ではあるが，〈～enough to〉構文と〈so～as to〉構文にも適用することができる。

（23）a. Do you think it's warm enough for the snow to melt?

b. Would you be so kind as to tell the time?（以上，Swan, 1995 : 266, 537）

（23 a）では「雪が溶けるほどの暖かさ」について質問がなされているのであって，気温の絶対的な暖かさが質問の対象となっているわけではない。他方，（23 b）では絶対的な優しさを期待して「時間を教えていただけませんか」と相手に依頼しているのである。

5. むすびにかえて

5.1　次のような例では，〈～enough to〉構文は問題なく用いられているが，〈so～as to〉構文のほうは不自然なので，自然な構文になるように to 以下に少し手を施す必要がある。

（24）a. He is old enough to receive a pension.

b. ??He is so old as to receive a pension.

c. He is so old as to be able to receive a pension.

「彼は年金をもらえるくらいの年齢だ」（「程度」）とか，「彼は年をとっているので年金がもらえる」（「結果」）といった意味を表すのが（24 a～c）であるが，to 不定詞以下は（24 a）では receive a pension のままでいいが，（24 b）ではそのままでは不自然なので，（24 c）のように be able to receive a pension のようにしなければならない。なぜか。

（11 a, b）から，（24 a）は「彼は年をとっているのでもらおうと思えば年金はもらえる」といったニュアンスが読みとれるに対して，（24 b）は「彼は年をとっているので当然年金をもらう」といったニュアンスが読みとれる。この「当然・・・する」ということは，殊「年金」に関して言えば，それは「年金」を「法的にもらえる資格がある」ということを承知しておかねばならない。したがって，「法的に・・・の資格がある」という意味をも表す be able to を付加して（24 c）のようにすれば，世間常識に適ったまったく自然な構文となる。

5.2 Watkins 他（1997 : 352-3）では，（25 a）のような〈so～as to〉構文の不自然さが指摘されている。

（25）a. ??He is so careful as to look up any new word in the dictionary.

b. He is so careful that he looks up any new word in the dictionary.

しかしながら，なぜ，（25 a）が不自然なのかは説明されていない。が，これにも（11 a，b）を適用すれば説明可能になる。すなわち，（25 a）は「彼は注意深いのでどんな新しい単語も辞書で調べる」といった意味だが，（11 a，b）によれば，〈so～as to〉の to 以下は「当然［実際］・・・する」といった意味内容になる必要がある。しかし，「注意深い」ことは「当然辞書でどんな新しい単語も調べる」ことには直結しない。つまり，「注意深い」ことから生じる事象の一つとして「辞書でどんな新しい単語も調べる」ということはありえても，両者の間に必然的関係はない，と受け止められるので（25 a）は不自然とされるのである。

5.3 〈～enough to〉構文と〈so～as to〉構文の自然さ・不自然さに関するネイティブスピーカーの反応は例文によって変化する事実も見逃せない。例えば，次のような例を見てみよう。

（26）a. She speaks clearly enough to be easily understood.（岡田，2001 : 306）

b. ??She speaks so clearly as to be easily understood.

いま，年齢・性別・職業も異なるアメリカ人とカナダ人，あわせて 7 人に（26 a）について尋ねたところ，なんら問題のない構文だとの返事を得たが，（26 b）については 7 人中 7 人とも不自然だとの返事であった。なぜか。ここでも，（11 a，b）を適用すれば，そのわけが明らかになる。すなわち，（26 a，b）とも「彼女は明瞭に話すので容易に理解してもらえる」といった意味だが，（26 a）は「明瞭な話し方をして，努めて理解してもらおうとする」といったニュアンスであるのに対して，（26 b）は「明瞭な話し方をするので，当

然理解してもらえる」といったニュアンスになる。が，「明瞭に話す」ことが必ずしも相手からの「理解が得られる」とは限らないので（26 b）は不自然とされる。

この（26 a）を挙げている岡田（2001 : 306）は，（27 a）のような〈so～as to〉構文も挙げている。

（27）a. The star is so bright as to be seen with the naked eye.（岡田, 2001 : 306）

b. The star is bright enough to be seen with the naked eye.

しかしながら，先の 7 人のネイティブスピーカーのうち，（27 a）を容認したのは 1 人だけで，あとの 6 人からは（27 b）のような〈～enough to〉構文にするか，例によって，The star is so bright that it can be seen with the naked eye. のような〈so～that〉構文にするべきであるとの回答を得た。なぜか。ここでも（26 a, b）と同様に，（11 a, b）を適用すると，そのわけが明らかになる。すなわち，（27 a, b）とも「その星は裸眼で見えるほど明るい」といった意味だが，（27 a）は「その星は明るいので，当然［実際］裸眼で見える」，（27 b）は「その星は明るいので，裸眼で見ようと思えば見える」といったニュアンスになる。が，「星が明る」くても「当然裸眼で見える」とは限らないので，（27 a）は不自然だとするネイテブスピーカーが多いのである。

こうしたネイティブスピーカーの反応とともに，次のような例に対しては，7 人の容認度は三とおりに分かれた。（28 a, b）を見られたい。

（28）a. The sentence is so vague as to be meaningless.（*OALD*[5]）

b. The sentence is vague enough to be meaningless.

（28 a）を容認したのは 7 人中 4 人で，（28 b）を容認したのは 7 人中 2 人，さらに，（28 a, b）のいずれも容認したのは 7 人中 1 人であった。そこで，ここでも，（11 a, b）を適用してみると，（11 b）から〈so～as to〉構文の to 不定詞以下は「当然［実際］・・・する」（正確には（28 a）は人称主語ではないので，「当然［実際］・・・なる」）といった意味内容になるので，（28 a）は「その文は曖昧なので実際，意味をなさない」といったニュアンスを表し，7

人中多数が自然な構文だと判断したものと思われる。しかしながら，（11 a）から〈～enough to〉構文の to 不定詞以下は「努めて［わざわざ］・・・する［なる］」あるいは「そうしようと思えば・・・できる」といった意味内容になるので，主語には人称主語が置かれることが前提となっている。ところが，（28 b）はそうではなので，不自然な構文だと受け止められ，容認したネイティブスピーカーは少数であったものと思われる。なお，（28 a，b）のいずれをも容認した 1 人は，The sentence is so vague that it is meaningless. のほうがよいと判断していることから，やはり，（28 b）は不自然だと考えられる。

（本論の草稿の段階でアドバイスをいただいた安藤貞雄博士と，ネイティブスピーカーからの立場でお力添えをいただいた Tony Sasayama さん，そしてネイティブチェックの手を煩わせた本学卒業生の前田知沙さんに記して感謝申上げる。）

参考文献

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English* Tokyo : Kaitakusha.

岡田伸夫　2001. *English Patterns One Hundred and Fifty* 京都：美誠社.

Quirk, R. *et al.* 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language* London : Longman.

Swan, M. 1995. *Practical English Usage* Oxford : Oxford University Press.

田中　実　2016.「〈～enough to〉と〈so～as to〉はイコールか」『英語教育』2 月号 pp.89-90.

Thomson, A. J. & A. V. Martinet. 1986. *A Practical English Grammar* Oxford : Oxford University Press.

Watkins, G. 他. 1997.『これでいいのか大学入試英語（下）』東京：大修館書店.

――文学部教授――